



大羽重神社は、大野原集落を見下ろす小高い丘の上に建つこの地区唯一の神社です。

建立の経緯は開拓時代当初、出身地や入植時期、入植理由などが異なり、生活習慣の違いによるトラブルが度々発生したことからだと伝えられています。桜島から住む場所を追われた住民と県内各地から新天地を夢見て移住した住民との間には考え

方に温度差があり、

集落が一体となって

信仰できる守護神が

必要となったため、

昭和2年にこの神社

が住民の手で建てら



れました。大羽重神社は今でも地区住民の心の拠り所となっており、神社の修繕等の維持管理も地域共同活動として行われています。平成25年には本殿の床や内外装の張替えも行われ、今なお朱色の美しい神社となっています。毎年11月に行われる豊年祭では、伝統の棒踊りが奉納されています。



棒踊りは、今から380年前に、関ヶ原の戦いで敗れた島津義弘公が、意気消沈した郷士の士気を鼓舞するために武芸の技を踊りに加えたものであると伝えられています。江戸時代になり元禄を過ぎる頃に、武士の踊りから農民の田植え踊りに代わって、国分・隼人・鹿兒島神宮のお田植え祭りに奉納されるようになり、広く県下で踊られるようになっていったといわれています。その後、長い中断期間を経て大正頃に薩摩半島から大隅へと棒踊りが伝わったものが大野地区の棒踊りとされています。



す。一度断絶したのち、有志による棒踊りの復活・保存が始まり、紆余曲折を経て現在に至ります。

かつては、地区の青年と中学生を中心に総勢24人からなる勇壮な踊りが地区内外で披露されていました。が、過疎化が進んだ現在では大野地区と交流のある鹿兒島大学の学生と、地区に住む若者によって継承されており、毎年11月に行われる豊年祭で踊りを奉納しているほか、鹿兒島大学の大学祭で学生たちが大野地区での活動を知ってもらうため披露しています。